

## ■逸脱についての訓練（4/4）

過去の成功や失敗などに気を取られて、任務からそれてしまう場合もある。使徒パウロは、自分が受け継いだ遺産や訓練、モーセの律法による義（ピリピ3:6）を達成しようとしてなした熱心な努力を思い起こした。それらはすべて、「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに」無益であるばかりか、有害であるように思われた（8節）。それゆえ彼は確信をもってこう言うことができた。「私は……ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです」（13、14節）。

パウロには自分の受け継いだ地位や立場を誇り、またそれを楽しむだけの生まれながらの理由があった。彼はユダヤ人としての特権（旧約聖書に通じ、約束を与えられ、正統的なパリサイ主義者であったこと）に安住することもできたであろう。またそのすぐれた家系を思いめぐらすなら、祖先崇拜に導かれたであろう。この祖先崇拜の慣習は、現代では中国のある人々に限られているわけではない。ある人々は、過去の利益や祝福や恩恵を思うあまり、将来のゴールに向かって現在努力しなければならないことを忘れてしまう。そういう人は、後ろを振り返りながら、あやふやな危険なコースを走るのである。

さて、これと反対の場合も起こりうる。すなわち、過去の過ちを悲しみ、失敗にいらだち、現在のことに将来のことにも、全然気が向かない。ただひとりでじっと人生の道ばたにうずくまり、心の痛みを胸に秘め、自分の無鉄砲ぶりを繰り返

り、数々の好機を逸したことを悲しみ、自分のみじめな心を叱責する。過去の長い暗影は、自分の現在の道までも暗くして日光をさえぎり、たび重なる失敗は将来の新しい失敗を予告し、古傷は決していやすことができず、文字どおり現在も将来もともに過去にのみ込まれてしまう。こうして私たちは、過去を忘れて進まなければならないということを思い起こさず、このような病的な記憶を頭に満たしてすべての物事を考える。

しかし、それは過ぎ去ったことであり、御血潮の下にあることなのだ。次のように言われている神におゆだねしてしまったことなのだ。「あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。あなたは、咎を赦し、ご自分のものである残りの者のために、そむきの罪を見過ごされ、怒りをいつまでも持ち続けず、いつくしみを喜ばれるからです。もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ入れてください」（ミカ 7:18、19）。過去はその恥も誇りも同様に、神の忘却の海に投げ込まれた。それゆえ私たちは、「うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです」（ピリピ 3:13、14）。

現在の不注意や、迫って来る危険によって、あるいは毎日のこまごまとした雑事に追われたり、過去の長い暗影に脅かされたりして、任務遂行の本道からそれることがないように訓練されることがたいせつである。これが、「私は……ただ、この一事に励んでいます」と私たちもまた言うことができるために必要な、逸脱についての訓練である。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十七章「逸脱についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。